



apital 患者のための医療サイト

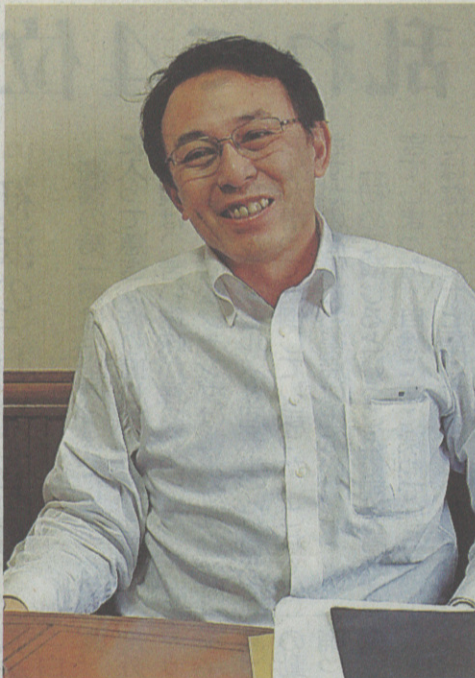
http://apital.asahi.com/

自宅での「平穏死」は可能

尊厳死以上に「平穏死」を。抗がん剤には「やめどき」がある——。こんな主張を続ける兵庫県尼崎市の「長尾クリニック」院長の長尾和宏医師のコラム「町医者だから言いたい！」が千回を超えた。コラムは、朝日新聞の医療サイト「アピタル」で連載されている。在宅で350人の診療を受け持ち、これまでに500人以上の患者をみとった。「現場から見える、僕だけにしか発信できないことを、これからも書いていきます」と語る長尾さんに聞いた。

アピタル連載千回の「町医者」

長尾和宏さん



ながお・かずひろ 1958年香川県出身。84年東京医科大学卒。長尾クリニック院長。「アピタル」スタート時から毎日コラムを更新している。「平穏死 10の条件」(ブックマン社)など著書多数。

——在宅診療に力を入れていきます。
開業したのは阪神大震災のあった1995年。商店街の一角で場所は良かったのに、1年目は患者が誰も来ない日が続きました。
気をつかって診察に通ってくれていた大家さんの容体が

悪化して通院できなくなり、在宅1号の患者さんになりました。自宅のみとりをした最初の患者さんでした。
いまでは在宅患者だけで350人。広い建物に移り、医師もスタッフも増やしました。土日祝日も外来診療をしています。ベッドはないけれど、

ど、350床の患者さんのいる病院と同じ。急変の知らせも、すべて僕の携帯にかかってくる。毎日当直医をしているようなものです。
——診療で心がけていることは。
当たり前のことを普通に一人ひとりに実践するだけで

す。勤務医時代、ひどい医師をたくさん見てきました。いまの医療は患者のためになっていないと実感。検査の数値ばかりみて、それを改善するために薬を飲ませたり、無理やり栄養を取らせたりして患者を苦しめています。
——終末期医療について、

積極的に発信しています。
今の医師や患者は、穏やかに自然に死が訪れる「平穏死」が可能だと信じています。延命にばかり力を入れていきます。ですが、実際には可能なのです。僕は何人もそうやってみとってきました。
先日、麻生太郎副総理が「(終末期の患者が)さっさと死ねるようにして」という非難を浴びました。基本的にこの発言の通りだと私は思います。ただし、この話を、医療費と結びつけようとするのは問題です。